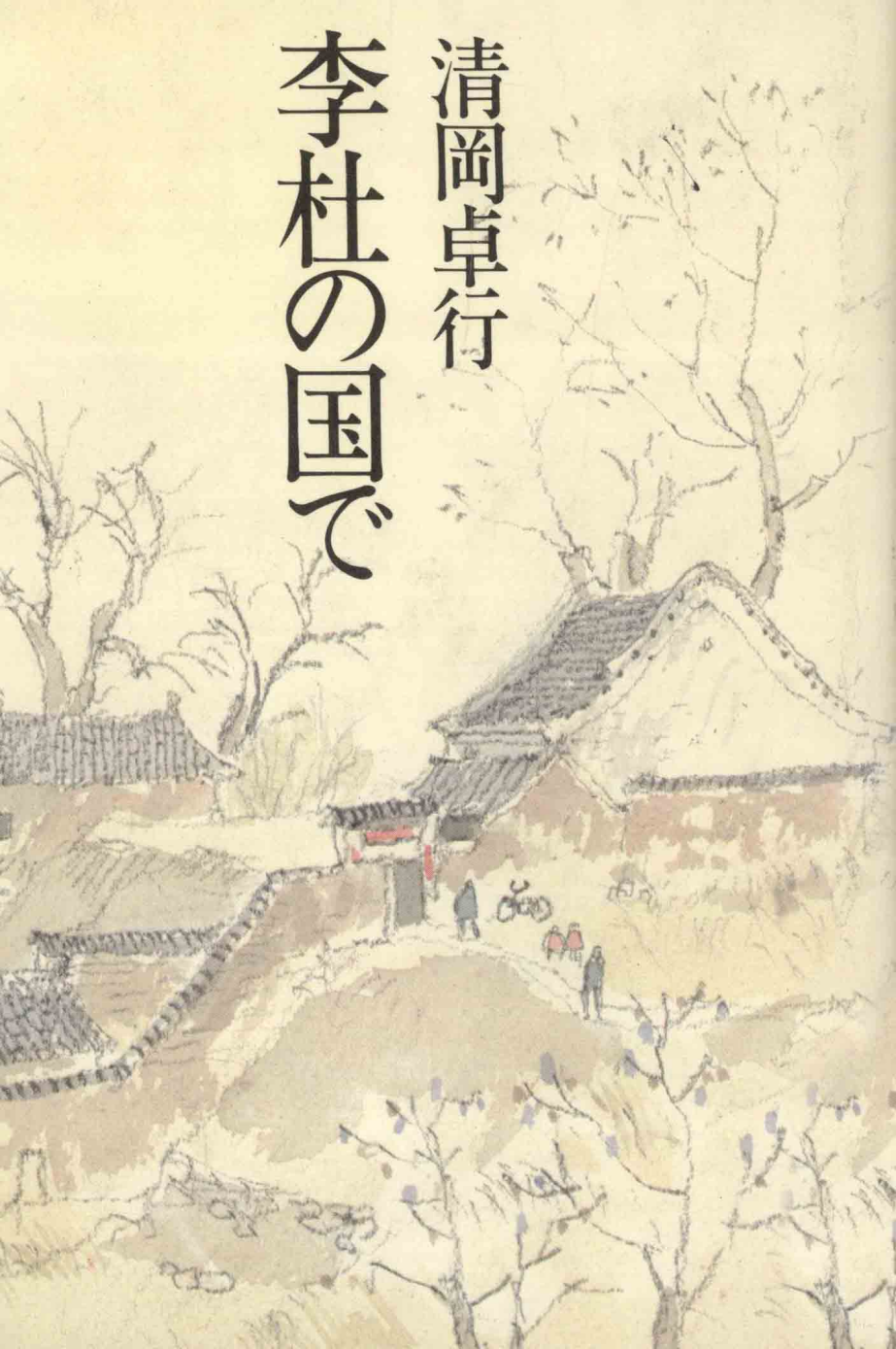
李杜の国で

清岡卓行



李杜の国で

清岡卓行

李杜の国で

一九八六年四月三十日　第一刷発行

著　者　清岡卓行

発行者　川口信行

発行所　朝日新聞社

〒104　東京都中央区築地五―三―二

電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）

編集・図書編集室　販売・出版販売部

振替　東京〇―一七三〇

印刷所　共同印刷株式会社

定価　一三〇〇円

© Takayuki Kiyooka 1986

ISBN4-02-255499-1

Printed in Japan

目次

長城へ　5
白楊の新芽　35
現場で読む詩　85
西安から洛陽へ　143
九朝の古都　213
破綻の回想　271
江南のプレスト　307

裝丁・安野光雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

李杜の国で

「朝日新聞」に一九八五年五月二十九日から八六年一月十八日まで連載。
八六年二月に加筆。

長城へ

北京から西北へおよそ五十キロ、燕山山脈の軍都山の峡谷のなかで、居庸関はひっそりと古びていた。

居庸は紀元前の書に早くも九塞（険阻な九つの地）の一つとして記されていたほどの要害である。やがてそこに設けられた関門が、戦乱のときも平和のときも、首都北京（古名は燕京、大都など）と北方あるいは西北方とのあいだのきわめて重要な通路となったのは当然だろう。

日本の詩人団の一行七名が最初に見学した史蹟はここであった。その眼前にあらわれた建造物は、元代にこの関門に設けられた大理石六角形のアーチである。雲台と呼ばれているこのアーチは、本来は同時に台座で、その上に元代建立のラマ塔三つが載り、それらの崩壊後には、明代建立の仏殿が載っていたという。現在、平らな台座の上にはなにもない。

詩人団は中国側の案内者二人の説明で、仄暗いアーチ内部の壁や天井、また明るい両側の門口の上部に、さまざまな彫刻を眺めた。詩人団のほとんどがその前でしばらく動けなかったほど惹きつけられた制作は、どちらも内壁のもので、まず、四天王像の力強く精緻な浮き彫りである。

ついで、六通りの刻字であった。サンスクリット文字、チベット文字、パスパ文字、ウイグル

文字、西夏文字、漢字を並べて刻んだ、一種異様な迫力のある十四世紀半ばのいわば国際的な文字交流である。そこに記されている内容は陀羅尼（だらに）であり、そして、アーチとその上のラマ塔三つの建立縁起であるという。

最初の史蹟見学は、しかし、十五分ほどのごく短いものであった。というのは、日本の詩人団の予定に、これは中国側がこの日の朝、宿舎の北京飯店を午前八時半に出発する直前、好意的に追加してくれたおまけの小さな見学であったからだ。

促された詩人団は、青味がかった緑色の上海型乗用車三台に分乗した。先頭の車から団長以下年齢順に、二名、二名、三名である。中国側は前の二台の助手席へ職務順に、ということは年齢順にもなるが、一名ずつ乗った。各台にはもちろん中国人の運転手が一名ずついる。

詩人団は前日、日本時間で午後四時まえに中国民航の飛行機で新東京国際空港（成田）を出て、中国時間で午後八時ごろに北京首都国際空港に着いた。十一月下旬の寒冷乾燥の夜気のなかを出迎えてくれたのは、同じ中国側の案内者二名である。

空港で握手と簡単な挨拶ののち、すぐいっしょに北京飯店へ向かったが、そのとき車三台にこの形で坐った。それを十七日間の旅行中つづけることにしたのである。

八達嶺にある万里の長城の一部をめざし、自動車は山峡をなお西北へ向かっている。あと九キロほどだ。

このあたりは両側から、険しくうねる山山が迫っている。金代に始まるという「燕京八景」で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、その一つとしてこのあたりの春の景色を選び、「居庸畳翠」と呼んでいる。起伏の豊かな山山において、波うつように重なって見える青葉の群れを、春の訪れの喜びとして賛えた言葉だろう。

この翠を畳ねた景観には、残念ながら、季節が異るので接することができなかった。両側の山山はもう冬枯れの時期に入っており、凄爽の気配さえほのかに漂わせている。

しかし、十一月下旬の快晴微風の午前、自然の風景は澄みきって乾いた大気のなかでどこまでも透明であり、そこにはまたそれ独自の魅力があるといえた。車窓からの眺めは、詩人団にとってすがすがしく身のひきしまるものであったにちがいない。

菊池大輔は三台目の車の後方の座席にいた。彼の三十七歳という年齢は詩人団のなかで五番目である。ただし、彼は詩人ではない。現代詩を主な対象とする評論家で、ときに小説や映画や音楽について批評めいた感想も書く。

菊池が今回の旅行に加わったのは、団長の詩人から誘われるままに、ふと、青春期に親しんだ唐詩の現場を訪れてみたいような気持ちになったからである。団長は菊池より三十歳も上であるが、二人はなんとなく肌が合う。

菊池には、中国でなにを見てなにを聞くかということさらの計画はない。東京で旅行のスケジュールを練る集まりがもたれたとき、参加者は各人五つまで見学の希望を出すことにした。合計で二十通りほどの案となったが、彼はただ「洛陽を歩きたいです」と言っただけだ。王維、李白、杜甫、白居易、李賀などが、千年以上も昔ではあるが歩いたその同じ場所で、空気を吸い、土を

踏むことができるなら、それだけでもいいじゃないか。そんなふうに思ったのである。

「あっ、万里の長城が見えてきました！」

菊池の右隣りに坐っている詩人団でいちばん若い遠山起美子が、しばらくつづいた沈黙を破って、感嘆の声をあげた。

「ほんとですね！」

助手席の藤森五郎が同じ調子の声で応じた。

彼は中国語がかなりわかるので、自分から望んでその席に坐り、運転手との必要な話を引き受けている。

菊池も斜め右先方に高くうねる山なみの赤茶色の稜線に、待望の城壁を見た。つぎつぎに、後続の城壁が現れてくる。

ふしぎな感動であった。

万里の長城の第一印象が、胃のあたりにまでひびいてくるある安らぎの快感、——漠然とした躊躇(ちゅうちょ)あるいは反撥をともないながらも、やはり美しいとまで感じられてくる雄大さへの驚きであったことに、菊池はほっとしていた。

「やはり、すごいですね」

彼は溜め息をもらすように言った。

ほっとしたということには、彼なりの理由があった。歴史上の巨大な記念的建造物に接するとき、彼はいつも矛盾におちいるのである。巨大な達成のすばらしさへの感嘆と、その建設のため

に苛酷に使役されたであろう彪大な民衆の労苦への同情、ならびに、巨大さが権力の象徴とた
た人間心理の動物的な暗さへのなかば絶望的な反撥。――こうした矛盾においてたいていの場合、
違和感の方がいくらかは大きかった。

しかし、万里の長城の場合、その達成が権力者の防衛線であるよりも民族全体の防衛線になっ
ているという、彼がそれまで味わったことのない別の迫力が加わっていた。そのため、彼のいつ
もの矛盾において、感嘆はより大きく、違和感はより小さくなったということだろうか。

「万里の長城の上を歩けますかしら?」

遠山起美子が穏やかな声でゆっくり言った。

なにかをしゃべるために、わかっていることを独り言のように口にしたといった調子がある。

「写真で見ると、歩いていますね。中国人だけでなくていろいろな外国人も……」

菊池は答えた。

二人の過去の関係を、詩人団のほかの人たちはだれも知らない。二人はかつてある時期、同棲
していたのである。それは詩壇全体においても知られていない、いわば秘密の同棲であった。そ
の方が二人にとって書きものの発表に得策であったのだ。別れたのは二年半ほど前である。

二十六歳であったそのころに比べて、二十九歳の起美子の若さは少しも変らない、もともとふ
っくらとした中肉中背であったから、三十代近くになっていわゆる脂が乗ってくる新しい感じが、
表面にはすぐ出ないのかもしれない。色白の丸顔はおっとりして、眼が大きく、物静かだ。

人間とは変らないものだなあ、というのが、二年半ぶりに今度の旅行の打合わせの集まりで起

美子に再会したとき、菊池がもった印象であった。――それにしても、車のなかで隣りに坐っている、同棲して別れた恋人とは、なんとふしぎな他人だろう。

峡谷の長い道を走っていた三台の車がやっと八達嶺の万里の長城に着いた。詩人団の一行は降り立って、眼前に大きく長く横たわる城壁を眺めた。

やや黒っぽい灰色の大きめの磚を積みあげた堅固な城壁は、高さはほぼ七メートル、基層の幅はほぼ八メートル、その上部の甬道（城壁のいただきの通路）の幅はほぼ六メートルという。もちろん、これは一つの基準で、大きさにはさまざまな場合があろう。

団長の三重野透は、城壁のこの量感に圧倒されたような顔をしていたが、いつもの温和な口調でぽつりと言った。

「やっと、来ましたなあ」

彼は銀行を定年退職して七年目の六十七歳である。痩せて長身、頭はもうすっかりはげ、細面の顔に眼鏡をかけている。今回の旅行を企画したところにも、じつは彼の詩人としての特徴の一端が出ているのだが、ときに冗談で、「世が世なら、漱石ぐらいの漢詩を書いて、それだけで満足しているんですがね」などと言う。

実際にも三重野透の現代詩の作品は、たとえば数歳上の妻との偕老を描いても、そこはかとなく言志の雰囲気をもっている。ついでに記せば、彼は造詣の深い唐詩において、少くとも現在は、平穏な老年、和やかな偕老を共通にする白居易をひいきにしているようだ。詩壇のあるひとびとはそんなふうに受けとっている。

八達嶺の万里の長城のそのあたりには、観光の業務のために設けられたと思われる小さな建物がいろいろある。その点では、日本の名所と同じような感じだ。見学者もしだいに増えてくる。中国人がやはり多いが、白人もいるし、黒人もいる。東南アジアのどこかの国の人ではないかと思われるグループが、日本人の耳には珍らしい言葉をしゃべっている。

「さあ、皆さん、万里の長城に登りましょう！」

高恵栄（こうけいえい）が丸顔の眼鏡のなかの目をほほ笑ませて、元気のいい高い声で言った。

彼女は中国側の案内の主任で、上海出身の四十一歳。こうした仕事をも行っているD協会の若い理事である。

階段を登って甬道にあがったとき、菊池大輔は、今までとは異ったふしぎな空間に入ったと感じた。高くひろびろした通路が、両側の女牆（じょしょう）（城壁の上の低い垣）によって独特の空間として区ぎられている。

菊池の前を、遠山起美子と高恵栄が話しながら歩いている。どちらも暖かそうなオーヴァー、同じような中肉中背である。女二人の親しそうな話にはわりこめない、と彼は感じる。表面が一辺三十センチほどの正方形に近い磚が、甬道に敷きつめられている。彼はその上を歩く両足が軽く浮くような気分になってきた。

菊池はふと立ちどまって、周囲の山山を眺めわたした。冬枯れに入っているから緑が乏しいのは当然だが、彼の視線のおよぶかぎり、ほとんどどこにも樹木がない。これは日本の山山に繁茂する樹木、冬でも豊かな常緑を含む森林を見なれてきた目にとって、一つの驚きであった。

それにしても、この山山の嶺から嶺へとどこまでも這っている、磚の鱗をまとった巨竜、万里の長城はほんとうにすごいではないか、と彼は思った。巨竜の胴体ばかりうねりくねって、頭と尾はどこにも見えないわけだが、また、今日では全長のところどころがとぎれているわけだが、数千キロも隔てたその両端は遥かかなたの山海関と嘉峪関にあると想像すると、いっそう眼前の現実は迫力を増してくる。

「天気がよくてよかったですね」

一行のしんがりを歩いている鍾得生が、菊池の傍らを通り過ぎようとして言った。

菊池は促されたように歩きはじめた。

「そうですね。きのうの夜、北京の空港に着いたときは、すごく寒くてびっくりしましたけれどね」

「もう、シベリアの寒波はどこかへ行きました。昼間なら、少しは暖かくなると思います。この八達嶺は、ふつうはもっと寒いです」

「ほう、それはうまいぐあいですね。北京の乾燥のすごいのにもびっくりしました。北京飯店でね、部屋の鍵穴に鍵を入れた途端、ごく小さなものだけど、火花が出ました」

「ははは……。乾燥という点については、寒くても、少し暖かくなっても、北京は東京よりずっと乾燥しています」

中国の青年は太く低い声で、愛想よくしゃべった。

鍾得生は哈爾浜出身の三十三歳で、D協会の工作員である。工作員とは、日本語に直せば職員

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com